様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３３９２９
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2016
課題番号：２６８７０６９４

研究課題名（和文）パーソナリティ特性による小中学生の問題行動，メンタルヘルス，学校適応の予測可能性

研究課題名（英文）The effects of personality on maladaptive behavior, depression and adaptation for school in childhood

研究代表者
谷　伊織（TANI, IORI）

東海学園大学・人文学部・准教授

研究者番号：１０５６８４９７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：疫学的パーソナリティ研究の視点からの研究デザインに基づき，パーソナリティ特性から問題があると考えられる結果変数を予測可能であるかどうかを実証するための研究を行った。小学校4年生から6年生および中学生の生徒を対象に、自己評定および教師評定、保護者評定による質問紙調査を行い，本人評定のパーソナリティ、抑うつ、攻撃性、自傷行為、非行行為、保護者評定のSDQによって測定される問題行動と養育態度、教師評定における対人関係、学業、情緒、身体的健康、反社会的行動等の学校適応・不適応を調べた。その結果、パーソナリティ特性によるさまざまな結果変数の予測可能性が示され、特に統制性の説明力の高さが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：The high rate of the maladaptive behavior among elementary and junior high school students is consistently pointed out in several studies in Japan.
So, we examined the effects of by five factor personality scales on maladaptive behavior in a children. Recently, it has become evident based by the results of a meta-analysis that personality variables predict the many maladaptive outcomes through life.Therefore, it would be expected that personality variable predict the outcome variables in this study.To examine the effects of personality on maladaptive behavior, we conducted a hierarchical multiple regression analysis. Result suggested that personality traits predict maladaptive behavior among Japanese Children.More detailed studies are needed, but it would be possible to predict the high-risk students by personality.

研究分野：教育心理学

キーワード：パーソナリティ特性　ビッグファイブ　適応行動　不適応行動

１．研究開始当初の背景

近年，継時的に安定していることが知られているパーソナリティ特性変数から，問題があると考えられる社会的な結果変数である自殺や自傷行為，不登校やひきこもり，精神疾患・犯罪や暴力を予測・説明し，問題への早期介入や心理的健康の増進等の可能性を検討する研究が国際的に盛んとなりつつある(e.g. Krueger, Caspi, & Moffitt, 2000)。例えば、Caspi (2000)は，3 歳時点における気質は, 15 年後のパーソナリティと整合的であり, 18 年後の抑うつや不安などの精神病理的な症状もよく説明できることを示しており，Poropat (2009)はメタ分析を行い，Big Five モデルのうち，勤勉性の高さが IQ と同程度に学力を予測し，誠実性と経験への開放性の高さも有意な効果量をもつことを報告している。Shiner, Masten, & Roberts (2003)は，10 歳時点のパーソナリティ特性は，認知能力(IQ)を統制してもなお，20 年後の学業達成・職業能力・反社会的行動・恋愛関係・友人関係とそれぞれ|.20|程度の関連性をもつことを示している。

このように，諸外国においてはコホート研究として有名なニュージーランドの Dunedin 研究やイギリスの Household 縦断研究などを通して既に多くの研究報告が存在し，その有用性が認められているが，わが国においてはこのような研究はほとんど見られないのが現状である。本邦においてもこのような取り組みが求められる。

２．研究の目的

そこで、本研究においては，問題があると考えられる結果変数である抑うつ・攻撃性・学校不適応・自傷行為・非行行為をパーソナリティ特性から予測する可能性を実証するための調査研究を行う。先行研究においては幼少時のパーソナリティ特性が長期にわたってさまざまな結果変数を予測することが明らかとなっているため，本研究においては小中学生を対象とした調査を行う。

Krueger et al. (2000) によると，パーソナリティ特性研究に導入されるべき疫学的な視点は 2 点あり，1 点はサンプリングの視点である。代表性があり，かつ比較的大きなサンプルを用いて，社会的に問題があると思われる結果変数とパーソナリティ特性との間の関連性について検討し，より正確な推定が行われる可能性を高めることが望ましい。2 点目は，予防・増進に関する視点であり，パーソナリティと関連する結果変数を未然に予防したり，良い方向へ増進させたりするために活用することが期待される。本研究においてはこれらの疫学的パーソナリティ研究の観点に基づき，小中学生を対象とした質問紙調査を行う。調査にあたっては比較的大規模なサンプルにおいて複数の評定者による多角的な観点からの測定を行う。

３．研究の方法

疫学的パーソナリティ研究の視点からの研究デザインに基づき，問題があると考えられる結果変数である抑うつ・攻撃性・学校不適応・自傷行為・非行行為をパーソナリティ特性から予測する可能性を実証するための質問紙調査研究を行った。具体的には，調査協力者である X 市の全公立小学校 4 年生から 6 年生および中学生の生徒 4688 名を対象に、自己評定および教師評定、保護者評定による質問紙調査を行った。自己評定としてはパーソナリティ、抑うつ、攻撃性、自傷行為、非行行為、保護者評定としては SDQ によって測定される問題行動と養育態度、教師評定においては対人関係、学業、情緒、身体的健康、反社会的行動等の学校適応・不適応を調査した。

４．研究成果

第 1 の研究成果として、パーソナリティ特性による問題行動や適応・不適応行動の予測に関する研究の現状および問題点について、国内外の文献を収集し、レビューが行われた。5 因子特性以外にも幅広くパーソナリティの概念について扱った。このうち、過去 1 年間の国内のパーソナリティ研究の動向については教育心理学年報の人格部門に採録された。

第 2 の研究成果として、小中学生を対象とした，5 因子モデルに基づいた性格特性を測定するための心理尺度の信頼性と妥当性，および性差と発達的変化を加味した標準得点について検討を行った。児童生徒にも簡便に使用されることを念頭におき、小学生用 5 因子性格検査（FFPC)（曽我，1999）より選定した 25 項目を用いた本人評定によるデータを対象として分析を行った。因子分析を行った結果、想定どおりの 5 因子構造を見出すことができ、各因子の信頼性も十分であった。また、性差と発達的変化についても検討したところ、小学生から中学生にかけては誠実性や同調性の低下等、どちらかといえば社会的に望ましくない方向に変化が見られることが示唆された。これらの結果は日本パーソナリティ心理学会およびアメリカ国際心理学会において発表された。

第 3 の研究成果として、小中学生を対象とした本人評定による質問紙調査データの分析の結果、パーソナリティ特性による抑うつや攻撃性といったメンタルヘルス，自傷行為や非行行為などの問題行動の予測可能性を検討した。先述の 5 因子パーソナリティ特性尺度得点と抑うつの指標として DSRS-C，攻撃性の指標としての HAQ-C との関連を相関分析と重回帰分析によって検討した結果、5 因子パーソナリティ特性から精神的健康度の予測・説明が可能であった。また、これは階層的重回帰分析によって学年や性別を統制してもなお十分な説明力を有していることが明らかとなった。

第 4 の研究成果として、小中学生を対象とした本人評定と教師評定および保護者評定調査データを分析し、パーソナリティ特性によって保護者の観点から見た不適応状態や、教師の視点から得られた学校適応状態が予測可能性であるかどうかについて検討した。先述の 5 因子パーソナリティ特性尺度得点と、保護者の観点からの測定される不適応行動として Strengths and Difficulties Questionnaire（SDQ）日本語版（Matsuishi et al,2008）との関連を検討したところ、5 因子パーソナリティ特性の統制性と協調性と向社会的行動や問題行動、多動・不注意との関連性が示された。また、階層的重回帰分析の結果、学年や性別を統制してもなお十分な説明力を有していることが明らかとなった。さらに、教師からの視点としては、教師評定による中学生用学校適応尺度（Teacher’s Rating school adaptation scale for junior high school students: TSAS-J）（大西他，2012）およびその小学生版に当たる TSSA-EA(大西，2013)を用いて測定を行った。その結果、保護者評定と同様に 5 因子パーソナリティ特性の統制性と協調性と反社会的行動や学業、心身の問題との関連性が示された。また、階層的重回帰分析の結果、学年や性別を統制してもなお十分な説明力を有していることが明らかとなった。ただし、教師評定と保護者評定の場合は、本人評定による抑うつや攻撃性よりは説明率が低いという結果が得られた。諸外国の研究においては、統制性（Concsientiousness，勤勉性，誠実性）と呼ばれるパーソナリティ特性が特に将来の適応・不適応を予測する力が高いことが複数の論文において報告されているが、本研究においても同様の結果が示された。この結果は感情心理学会およびパーソナリティ心理学会にて発表された。

〈引用文献〉

Krueger, R.F., Caspi, A. & Moffitt, T.E. (2000). Epidemiological personology: The unifying role of personality in population-based research on problem behaviors. *Journal of Personality*, **68**, pp. 967 - 998

Shiner, R.L., Masten, A.S., Roberts, J.M.(2003). Childhood personality foreshadows adult personality and life outcomes two decades later. *Journal of Personality*, **71**, Pp.1145-1170.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 10 件）

①村上隆・行廣隆次・伊藤大幸・安永和央・谷伊織・平島太郎 (2016). 発達障害児者の援助に役立つ数量的アセスメント (8) 測定の信頼性と妥当性 (2) アスペハート, **42**, 92-105. (査読無)

②小嶋理江・谷伊織・北折充隆 (2015). 運転免許停止処分者講習の受講に関する実践的研究　－講習前後の態度変化－ 交通心理学研究, **31**, 14-25.

③村上隆・行廣隆次・伊藤大幸・安永和央・谷伊織・平島 郎 (2015). 発達障害児者の援助に役立つ数量的アセスメント (7) 測定の信頼性と妥当性 (1) アスペハート, **40**, 102-113. (査読無)

④谷伊織・伊藤大幸・平島太郎・岩永竜一郎・萩原拓・行廣隆次・内山登紀夫・小笠原恵・黒田美保・稲田尚子・原幸一・井上雅彦・村上隆・染木史緒・中村和彦・杉山登志郎・内田裕之・市川宏伸・辻井正次(2015). 日本版短縮感覚プロフィールの標準化 ： 標準値および信頼性・妥当性の検討 精神医学, **57**, 419-429. （査読有）

⑤Naoko Inada, Hiroyuki Ito, Kazuhiro Yasunaga, Miho Kuroda, Iori Tani, Ryoji Yukihiro, Tokio Uchiyama, Kei Ogasahara, Ryoichiro Iwanaga, Taku Hagiwara, Koichi Hara, Masahiko Inoue, Takashi Murakami, Fumio Someki, Kazuhiko Nakamura, Toshiro Sugiyama, Hiroyuki Uchida, Hironobu Ichikawa, Yuki Kawakubo, Yukiko Kano, Masatsugu Tsujii (2015). Psychometric properties of the Repetitive Behavior Scale-Revised-Japanese Version (RBS-R-J). *Research in Autism Spectrum Disorders*,**15**,60-68. （査読有）

⑥谷伊織 (2015). パーソナリティに関する研究の動向と課題 教育心理学年報, **54**,30-44. （査読有）

⑦川本哲也・小塩真司・阿部晋吾・坪田祐基・平島太郎・伊藤大幸・谷伊織　(2015)ビッグ・ファイブ・パーソナリティ特性の年齢差と性差—大規模横断調査による検討— 発達心理学研究, **26**,107-122. （査読有）

⑧伊藤大幸・行廣隆次・安永和央・谷伊織・平島太郎・村上隆 (2015). 発達障害児者の援助に役立つ数量的アセスメント (6) 適応行動と不適応行動の評価：Vineland 適応行動尺度第二版 アスペハート, **39**, 96-105. (査読無)

⑨伊藤大幸・行廣隆次・安永和央・谷伊織・平島 太郎・村上 隆 (2014). 発達障害児者の援助に役立つ数量的アセスメント (4) 関係の能力の測定：発達障害特性の把握 (1) アスペハート, **37**, 110-118. (査読無)

⑩伊藤大幸・行廣隆次・安永 和央・谷伊織・平島太郎・村上隆 (2014). 発達障害児者の援助に役立つ数量的アセスメント (5) 関係の能力の測定：発達障害特性の把握 (2) アスペハート, **38**, 84-95. (査読無)

〔学会発表〕（計 15 件）

①谷伊織 (2016). 小中学生の 5 因子性格特性と精神的健康度および不適応行動との関連 日本行動計量学会第 45 回大会(2016 年 9 月), 札幌市

②谷伊織 (2016). 児童用 5 因子性格特性尺度の信頼性および妥当性の検討 日本パーソナリティ心理学会第 25 回大会(2016 年 9 月), 大阪市

③ Iori TANI (2016).Personality development

among Japanese children. The 31st International Congress of Psychology (2016 年 7 月),Yokohama, Japan

④Iori TANI (2016). The effect of difference models of personality on predictive power. The 31st International Congress of Psychology (2016 年 7 月),Yokohama, Japan

⑤谷伊織(2016). 小中学生の 5 因子性格特性と不適応行動の関連　日本感情心理学会第 24 回大会(2016 年 6 月), つくば市

⑥Iori Tani (2016). Personality Traits Change and Factor Structure in Childhood in Japan 28th Association for Psychological Science Annual Convention, (2016 年 5 月) Chicago, USA

⑦天谷祐子･谷伊織 (2015). 性格特性の 5 因子とプライバシー意識･リスクテイキング行動との関連. 日本心理学会第 78 回(2015 年 9 月), 名古屋市

⑧谷伊織 (2015). 小中学生の 5 因子性格特性と日本語版 SDQ の関連ー SDQ の日本語版の保護者評定による検討ー　日本パーソナリティ心理学会第 24 回大会(2015 年 8 月), 札幌市

⑨谷伊織･五十嵐素子･森山雅子･杉本英晴 (2015). 子短期大学生の心理的発達に関する縦断研究(32）－学校満足度とパーソナリティ､愛着の関連－　日本教育心理学会第 57 回総会(2015 年 8 月), 新潟市

⑩Iori Tani, Motoko lgarashi, Masako Moriyama, Hideharu Sugimoto(2015). The effect of personality and depression on academic performance and self-esteem in a longitudinal sample of college students. The l4th European Congress of Psychology(2015 年 7 月),Milan, Italy

⑪谷伊織・川島一晃・天谷祐子 (2014). ５因子性格特性とプロアクティヴ・コーピングの関連. 日本教育心理学会第 56 回総会 (2014 年 11 月), 神戸市

⑫天谷祐子･谷伊織 (2014). 性格特性の 5 因子と他者意識・利他行動との関連　日本カウンセリング学会第 47 回大会(2014 年 8 月), 名古屋市

⑬谷伊織・天谷祐子 (2014). 社会的望ましさ反応と他者意識・利他行動との関連　日本カウンセリング学会第 47 回大会(2014 年 8 月), 名古屋市

⑭谷伊織 (2014). 小中学生の 5 因子性格特性と抑うつの関連. 日本感情心理学会第 22 回大会(2014 年 5 月), 宇都宮市

⑮谷伊織 (2014). 小中学生の 5 因子性格特性と攻撃性の関連. 日本パーソナリティ心理学会第 23 回大会(2014 年 10 月), 甲府市

〔図書〕（計 2 件）

①谷伊織 (2017). 第 1 章 人間の性格は何次元か？―因子分析― 荘島宏二郎（編著）計量パーソナリティ心理学 ナカニシヤ出版 Pp.1-17

②谷伊織 (2015). コラム 4　職業別適性検査（職能別適性検査）古澤照幸 (編集), 榎本博明 (編集) 人事のための心理アセスメント 活用のための実践ガイド 日本文化科学社 Pp.45-46

６．研究組織

(1)研究代表者

谷　伊織（Tani Iori）
東海学園大学・人文学部・准教授
研究者番号：10568497